

《創世記 5章1節 ～ 6章8節》

◆ 読んで・聴いて 思い巡らそう

【メモ・Memo】

- 心に届いたみ言葉
- 時代への呼びかけ
- 「悔い改め」
- 気づき
- 教会に示されたこと
- イエスさまとの関連

◆ 聖書味読 翻訳の違い

創世記 6章2節

- 新共** 2 神の子らは、人の娘たちが美しいのを見て、おのおの選んだ者を妻にした。

- 口語** 2 神の子たちは人の娘たちの美しいのを見て、自分の好む者を妻にめとった。

- 2017** 2 神の子らは、人の娘たちが美しいのを見て、それぞれ自分が選んだ者を妻とした。

- フラ** 2 神の子らは人の娘たちを見て好ましいと思い、望むままに彼女らを娶った。

- 岩波** 2 神の子らが人の子娘たちを見ると、彼女たちは美しかった。そこで彼らは、自分たちが選り好むものをすべて妻にめとった。

- L B** 1-2 さて地上では、人々がどんどん増えてきました。その頃のことです。霊の世界に住む者たちが、地上に住む美しい女を見そめ、それぞれ気に入った女を妻にしてしまったのです。

- 現代** 2 信者までもが、不信者の女性の外面的な美しさに心を奪われ、その女性たちと結婚するようになった。

- 70人** 2 神の子らは、人間たちの娘たちが美しいのを見て、選んだすべての（娘たち）の中から、（好きな者を）自分たちの妻にした。

*

創世記 6章5節～8節 ※神の「後悔」と「決心」

●**新共** 6 地上に人を造ったことを後悔し、心を痛められた。7 主は言われた。「わたしは人を創造したが、これを地上からぬぐい去ろう。人だけでなく、家畜も這うものも空の鳥も。わたしはこれらを造ったことを後悔する。」8 しかし、ノアは主の好意を得た。

●**共同訳** 5 主は、地上に悪がはびこり、その心に計ることが常に悪に傾くのを見て、6 地上に人を造ったことを悔やみ、心を痛められた。7 主は言われた。「私は、創造した人を地の面から消し去る。人をはじめとして、家畜、這うもの、空の鳥までも。私はこれらを造ったことを悔やむ。」8 だが、ノアは主の目に適う者であった。

●**口語** 6 主は地の上に人を造ったのを悔いて、心を痛め、7 「わたしが創造した人を地のおもてからぬぐい去ろう。人も獣も、這うものも、空の鳥までも。わたしは、これらを造ったことを悔いる」と言われた。8 しかし、ノアは主の前に恵みを得た。

●**新改訳 2017** 5 主は、地上に悪が増大し、その心に凶ることがみな、いつも悪に傾くのご覧になった。6 それで主は、地上に人を造ったことを悔やみ、心を痛められた。7 そして主は言われた。「わたしが創造した人を地の面から消し去ろう。人をはじめ、家畜や這うもの、空の鳥に至るまで。わたしは、これらを造ったことを悔やむ。」8 しかし、ノアは主の心にながらっていた。

●**新改訳 改訂3** 5 主は、地上の悪が増大し、その心に計ることがみな、いつも悪いことだけに傾くのご覧になった。6 それで

主は、地上に人を造ったことを悔やみ、心を痛められた。7 そして主は仰せられた。「わたしが創造した人を地の面から消し去ろう。人をはじめ、家畜やはうもの、空の鳥に至るまで。わたしは、これらを造ったことを残念に思うからだ。」8 しかし、ノアは、主の心にながっていた。

●**フラ** 6 地上に人を造られたことを悔やみ、心を痛められた。7主は仰せになった、「わたしが創造した人をはじめ、家畜、地を這うもの、空の鳥までも、地の面から滅ぼそう。それらを造ったことを悔いているから」。8 しかし、ノアは主の心にながっていた。

●**LB** 5 神様は、人間の悪が目もあてられないほどひどく、ますます悪くなっていく一方なのを知って、6 人間を造ったことを残念に思うのでした。心がかきむしられるようなつらさです。7 「せっかく造った人間だが、こうなった以上は一人残らず滅ぼすしかないな。人間ばかりじゃない、動物もだ。爬虫類も、それから鳥も。いっそ何も造らなければよかったのだ。」神様は悔やみました。8 しかしノアは別でした。彼だけは、神様に喜ばれる生き方をしていたのです。ここでノアのことを話しましょう。

●**現代** 5 主は地上に悪が増え、その心の中で考えることがいつも悪いことばかりであるのをご覧になった。6 それで主は、地上の人間のことを悲しみ、心を痛められた。7 しうは仰せられた。「わたしは人を創造したが、それを地上から滅ぼしてしまおう、人ばかりでなく、家畜や爬虫類や空の鳥も皆、絶やしてしまおう。わたしはこれらのものに失望した。」8 しかし、ノアだけは違っていた。彼は主の御心にながっていた。

●岩波 5 ヤハウエが見ると、地上には人の悪がはびこり、その心が図る企てという企ては、終日、ひたすら悪であった。6 ヤハウエは、地上に人を造ったことを悔やみ、心に痛みを覚えた。7 ヤハウエは言った、「わたしは、自ら創造した人を大地の面から拭い去ろう。人だけでなく獣までも、這う生き物までも、空の鳥までも。これらを造ったことがじつに悔やまれる」。8 しかし、ノアはヤハウエの恵みを得た。

●70人 5 主・神は、人間たちの諸悪が大地にはびこり、だれもが心の中で来る日も来る日もあしきことだけに臣をはせているのを見た。6 神は地の上に人をつくったことを悔やみ、そして(何をなすべきかを)考えた。7 神はつぶやいた。「わたしは自分がつくった人を大地のおもてから抹殺する。人から家畜にいたるまで、這うものから空の鳥まで。これらをつくったことを怒っているからだ。」8 しかし、ノアは主・神の前に恵みを見出した。

◆ み言葉を生き み言葉を伝えるために

① ここで、普通に気になること 長寿の意味。そして、彼らはみな基本的に「生まれ・生き・もうけ・死んだ」と記録される。

創世記 5章はアダムからのノアに至るまで、10世代の人びとの系図があるが、不思議なのは、人びとの寿命が常識外れに長いことである。

アダム 930 歳 (5 節)、セト 912 歳 (8 節)。ちなみに、ノアは洪水のあと 350 年生き 9:28、9:29 で 950 歳になって死ぬ。このあとふれる、エノクは、祝福されているが 23 節・365 歳で死んでいる。際だって短命とも言える！

最長は 25 節～ 27 節の「メトシェラ」で〈969 歳〉である。10 世紀もの長生きの人間が存在するのか。諸説あるが、一つの結論は、長寿を神の祝福とする考え方である。

今日のわたしたちと同じようになるのは、いつからか。

ノアの洪水の物語の最初 6:3 に

こうして、人の一生は百二十年となった。

とある。

続いて、カナン定住からである。詩編詩人はこう歌う。詩編 90:10 を読もう。

90:10 人生の年月は七十年程のものです。健やかな人が八十年を数えても／得るところは労苦と災いにすぎません。瞬く間に時は過ぎ、わたしたちは飛び去ります。

② 「エノク」にみる「祝福」 記録された人びとの中で、「エノク」以外はすべて、「**そして死んだ**」とある。

そして、エノクだけが、「いなくなった・見えなくなった（フラ）」とある。

しかも、エノクとノアだけが「神と共に歩み」とある。

【新共同訳】 5:24 エノクは神と共に歩み、神が取られたのでいなくなった。

【聖書協会・共同訳】 5:24 エノクは神と共に歩み、神が取られたのでいなくなった。

【口語訳】 5:24 エノクは神とともに歩み、神が彼を取られたので、いなくなった。

【フランススコ会訳】 5:24 エノクは神とともに歩み、神がエノクを取られたので、見えなくなった。

【新改訳 2017】 5:24 エノクは神とともに歩んだ。神が彼を取られたので、彼はいなくなった。

【新改訳改訂3】 5:24 エノクは神とともに歩んだ。神が彼を取られたので、彼はいなくなった。

*

【神と共に歩み】を「創世記」で検索

創 5:22 エノクは、メトシェラが生まれた後、三百年神と共に歩み、息子や娘をもうけた。

創 5:24 エノクは神と共に歩み、神が取られたのでいなくなった。

創 6:9 これはノアの物語である。その世代の中で、ノアは神に従う無垢な人であった。ノアは神と共に歩んだ。

ヘブライ人への手紙 11章5節を見よう。

11:5 信仰によって、エノクは死を経験しないように、天に移されました。神が彼を移されたので、見えなくなったのです。移される前

に、神に喜ばれていたことが証明されていたからです。

さらに、エノクの他には、エリヤが天に取り去られた人として知られる。死んだという記録はエリヤにはない。だから、福音書で「エリヤ」が来るのを人びとが待ち望んでいることが分かる。

列王記下 2:9 以下参照。

2:9 渡り終わると、エリヤはエリシャに言った。「わたしがあなたのもとから取り去られる前に、あなたのために何をしようか。何なりと願いなさい。」エリシャは、「あなたの霊の二つの分をわたしに受け継がせてください」と言った。

2:10 エリヤは言った。「あなたはむずかしい願いをする。わたしがあなたのもとから取り去られるのをあなたが見れば、願いはかなえられる。もし見なければ、願いはかなえられない。」

2:11 彼らが話しながら歩き続けていると、**見よ、火の戦車が火の馬に引かれて現れ、二人の間を分けた。エリヤは嵐の中を天に上って行った。**

2:12 エリシャはこれを見て、「わが父よ、わが父よ、イスラエルの戦車よ、その騎兵よ」と叫んだが、もうエリヤは見えなかった。エリシャは自分の衣をつかんで二つに引き裂いた。

イエス・キリストもまた、人の罪のために死んで葬られた後、復活して天に上げられたことと無関係ではないだろう。

③ 「神と共に」の先に見える、イエス・キリストとの結び付き 今橋朗先生は言う。

わたしたちは、みんな、エノクのように生きることが出来ます。そして、そのように、神と共に生き、生んだ者に、「死んだ」とい

う表現はまったく不適當になります。

「神が」彼を取られたので、「いなくなった」のです。このように、生きるにも死ぬにも、「神が」中心にお立ちになる時、生きることは慰めであり、死ぬことは凱旋です。その時に、広大な、わぎしき墓地は、神と共に生きた人の人生の証し塚と変わり、死の哀歌ではなく凱旋の賛歌がどよめきわたるのです。

第一コリント書 15:22 を読みましょう。

15:22 つまり、アダムによってすべての人が死ぬことになったように、キリストによってすべての人が生かされることになるのです。

④ アダムのもう一人の子セトに与えられる「エノシュ」の系譜は年齢がはっきりと記録され、世代が途切れること無く継続している。しかも長寿である。

アベルは死に、カインは 4:16 「しるしを付けられ、主の前を去り、エデンの東、ノドの地に住んだ」。

二人だけになったアダムとエバに、神はもう一人の子セトをお授けになった。

セトは 5:3 「**自分に似た、自分にかたどった男の子**」だった。アダムは 1:27 によれば、まだ名前は付けられていないが、「**神はご自分にかたどって人を創造された。神にかたどって創造された**」という存在であることを思い起こしたい。即ち、セトはアダムのかたちの通りの子である。セトは神の形を受け継いでいる。

⑤ セトの子エノシュ 神の御名を呼び始めた＝礼拝する人の姿と考えられる 4:26、5:6-11参照

セトの子はエノシュである。4:26 に既に「**男の子が生まれた。彼はその子エノシュと名付けた**」とあった。エノシュの時代に、4:26 によれば「**主の御名を呼び始めた**」とある。

カインの子孫は4:19以下で、神さまから離れて行った。

それ対して、エノシュの子孫は、4章の終わりにあるように、神を礼拝する人間の姿を見せてくれる。そしてそのエノシュの系図が続いて行く。

「エノシュ」の名の意味は、元来、弱さを意味する。「エノシュ」の語源は動詞の「アーナシュ」である。「壊れやすい、なおらない、癒えない」といった宿命的な弱さを表わすことばであることは興味深い。

カインの子孫レメク（4:19以下参照）の《力の誇示・驕り高ぶり》と比べて、神さまの前で、人間は弱い存在であるとの認識が感じられる。

⑥ セトの子孫一人ひとりに 6節～32節

神さまは人類をただ全体として支配しておられるのではなく、ここに「一人ひとり」の名前が記されている通り、一人ひとりを顧みておられる。詩編 8:4-5 を思う。

「8:4 あなたの天を、あなたの指の業を／わたしは仰ぎます。月も、星も、あなたが配置なさったもの。5 そのあなたが御心に留めてくださるとは／人間は何ものなのでしょう。人の子は何ものなのでしょう／あなたが顧みてくださるとは。」

⑦ 6章から始まるのは「ノアの洪水」である。注目は、翻訳の比較をした、6章5節である。「罪」の問題を考えざるを得ない。事の始まりを聖書は6章2節で告げていた。

林嗣夫先生はこう語る。

ノアの時代の結婚の秩序はすっかり崩れていた。「自分の好む者を妻にめとった」とありますが、これは、ちゃんとした結婚生活

を意味するものではなく、衝動的な乱れた男女関係を表すものです。神さまから離れた人間の世界はどうしても墮落していきます。神さまはこの状態を見過ごしにされません。人間の生命を 120 年に限定されました。

⑧ 神さまが「悔い」「心を痛め」「滅ぼそうと決意」される。創世記1:31の「それは極めてよかった」とは正反対の状況がある。

⑨ 神が全てを決心の中、ノアに示された神のみ心

6章8節「ノアは主の好意を得た」「恵みを得た」人である。彼を通じて何が見えてくるのだろう。

LB

6:8 しかしノアは別でした。彼だけは、神様に喜ばれる生き方をしていたのです。

岩波訳（月本昭男）

6:8 しかし、ノアはヤハウエの恵みを受けた。

70人訳

6:8 しかし、ノアは主・神の前に恵みを見出した。

英語訳

【NKJV】 6:8 But Noah found grace in the eyes of the Lord.

【TEV】 6:8 But the Lord was pleased with Noah.

【KJV】 6:8 But Noah found grace in the eyes of the LORD.

以上